

多様な価値を結ぶ：スミソニアン1

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行①]

2024 年 4 月 27 日

講座要旨

今年度の館長講座は、新しいシリーズでお話します。「歴史博物館グローバル紀行」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡ることにします。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ねて、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。全体の内容は、次のように予定しております。①多様な価値を結ぶ：スミソニアン1、②超大国の威信：スミソニアン2、③さまざまなパリの顔とミュージアム、④遠洋航海者：太平洋の人々と文化史、⑤戦争の記憶をつなぐ展示と歴史観、⑥南フランスの遥かなる先史時代、⑦ネイティブ・アメリカンの世界1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界2、の順でお話します。おおむね、アメリカとフランスの博物館を主にしますが、適宜ほかの国々の博物館にも触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思います。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参照いただければ幸いに存じます。

今回は、アメリカの首都、ワシントンD.C.にあるスミソニアンの博物館群をご紹介します。スミソニアンといえば、知る人ぞ知る世界最大の博物館群としても名が通っています。その実際の姿（ごく一部になりますが）を、垣間見ていきたいと思います。ワシントンD.C.の中心部に、東西に伸びる広大な広場があって、ナショナル・モールと呼ばれています。両端には、議会議事堂、リンカーン大統領記念堂、北にはホワイトハウスなどがあり、西方にはポトマック川が流れ、その河畔は日米親善を象徴する桜並木の名所となっています。西南方ポトマック川の対岸には、ペンタゴン（米国防総省）があります。まさに合衆国の中枢部分といえます。スミソニアンの博物館群は、ナショナル・モールの両側に並び、巨大建造物群は都市計画の一部分を構成します。Smithsonian Institution（スミソニアン協会）には、21館の国立博物館、国立動物園が属しています。その全部を紹介することは難しいですが、講座では主要な博物館で、館長が訪ねたり教育交流経験のある部分を重点的にお話します。アメリカ・インディアン博物館、自然史博物館、アメリカ歴史博物館、航空宇宙博物館とウ

ドヴァー・ヘイジーセンター、アフリカ美術博物館、アジア美術博物館などです。

スミソニアン協会は、1846年に創設されました。その起源には、ある人物が大きく関わりました。ジェイムズ・スミソン（1765 - 1829）は、イギリスの大富豪で、父は貴族、母は王族の家系でしたが、著名な科学者でもありました。専門は当時の最先端、化学と鉱物学で、22歳の若さで王立協会会員の榮譽を得ていました。死去に際して遺言を残し、「知識の普及と向上のため」すべての財産をアメリカ合衆国に寄贈するとしました。それがスミソニアン協会の元になりました。ワシントン D.C. のスミソニアン協会本部は、19世紀の城郭風の建築で、Castleの愛称があります。そこにスミソン氏は安置されており、展示もあります。博物館群とともに、スミソニアン協会は権威ある研究所でもあり、アメリカの自然史や、美術史、歴史学、人類学研究の中核としての役割を果たしてきました。収蔵標本数は、1億4200万点とも言われます。また、国家予算、寄付、出版などで運営されていて、すべての博物館の入館料は、無料となっています。

アメリカ・インディアン博物館は、2004年にオープンしました。曲線基調のユニークな建築で、インディアン諸部族の文化と歴史を総合的に展示しています。展示では、インディアン諸部族の文化の内部からみた視点も重視され、民族の尊厳を尊重する歴史観があります。かつての19世紀的な先住民に対する蔑視観は、大きく転換しました。極北から砂漠までの極めて多様な環境のもとで、生き抜いてきたアメリカ・インディアン諸族の独自の民族文化が、敬意を持って解説されています。講座でご紹介する特別常設展示（長期間のテーマ展）は、「国家から、国家へ：合衆国とアメリカ・インディアンの国々」と題して、国家間の条約として結ばれた取り決めが、いかに破られていったかという歴史と、インディアン諸族が持っていた文化の独自性を詳細に解説しています。1876年にカスター部隊長が率いる第7騎兵隊に勝利した、リトル・ビッグホーンの戦いや、その前後の時代の虐殺の歴史も展示に含まれています。

スミソニアン博物館群では、インディアン諸族の歴史や文化は、以前は自然史博物館の一部として、研究も行われていました。膨大な資料も収集され、蓄積されてきました。国立博物館の開設は、大きな転換のように思われます。考古学、人類学の分野においても、時代的な研究内容の変化もあります。1980年代以降、「再埋葬問題」が表面化し、立法措置も行なわれてきました。かつて掘り出された収集資料を、本来の部族の下に返却して本来のあり方で遺体を葬り直すというものです。また、返還運動（repatriation）も普通の手続きになっています。先週、4月17～21日に開催されたアメリカ考古学会（Society for American Archaeology）におきましても、あるフォーラム（分科会）はインディアン諸族の本来の文化的価値と考古学研究が、どういう関係にあるか討論を行なっていました（館長聴講）。

ほかにも、現代の「多様な価値観の時代」は、各博物館の研究や展示にも、大きく影響しているように思われます。むしろ、博物館の側が、現代の時代的要請にどのように応えているかが、問われているようにも思われます。19世紀にアフリカから「収奪」された優れた美術品の返還問題は、端的な事例と言えるかもしれません。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

- ・ワシントン D.C.の特色。D.C.はコロンビア特別区。合衆国東部と南部の境にあり、人口約 60 万人で意外にコンパクト。隣接のメリーランド州とバージニア州北部を合わせた「大首都圏」では、人口約 800 万人。太平洋岸のワシントン州とは、会話でしばしば混乱します。政治の中心なので、「ローカルニュースが全国ニュース」のジョークがある。

- ・文化的にはスミソニアンはじめ、多くの施設が国民的人気。アメリカの一大観光地でもあり、学生・生徒たち、家族連れが訪れる。政権が代わると、一大人口移動が起きて、不動産業が大きく動く。経済的には、首都よりも、ニューヨーク、テキサス、カリフォルニアなど多極化していて、ワシントン D.C.は、むしろ、国のアイデンティティとしての、象徴的存在。

- ・ポトマック河畔の桜並木の満開風景（講座でのスライドの多くは、館長撮影）。1912 年に、日米親善の象徴として、尾崎行雄東京市長ほかの尽力で、3020 本が贈られた。スミソニアンの博物館群の立地、ナショナル・モールの巨大広場と周辺の地理とを説明。ホワイトハウス、議会議事堂、地下鉄路線などの様子。地下鉄は 1960 年代以降の建設で、大きなトンネルと大深部の設計は、冷戦時代の防衛施設という側面もあったとの説明がある。

- ・スミソニアン協会の由来について。ジェイムズ・スミッソンの肖像と人生、「お城」本部の様子。なお、**Smithsonian Institution** は、一般に「協会」と訳されているが、英語の意味はもっと強固な「機構」に近いこと（館長説）。巨大博物館群の紹介。どれも桁外れに大きく、見学時間の不足感が常にあります。協会の寄付金募集プログラムの紹介。米国の富裕層の、寄付文化と、税制の優遇があること。全ての博物館は入館料がタダ。教養科学雑誌 **Smithsonian** の紹介とコメント。記事の各分野の背景に、最高水準の学者陣がいること。情報公開に力を入れており、世界最大規模のオープンアクセス・プログラムを拡大中。

- ・国立自然史博物館の外観、円形吹き抜けホールの象徴的な「ゾウさん」展示、フロアマップで 1 階と 2 階の展示分野が広く、地球の歴史から人類史の全体をカバーすること。世界最大級のダイヤモンドで、歴代の所有者に不幸が襲ったという「ホープ・ダイヤモンド」の展示室。中生代の恐竜ギャラリーは一番人気で、化石、骨格標本などを大量に展示、見学の行列もできる。自然史博物館は、**Nature** の歴史にとどまらず、地球上のすべての、人類史を含めた歴史を取り扱っている。すなわち人類も自然史の一部であることが強調される。アルプス山中で凍結状態のまま発見された、青銅器時代初期、約 5000 年前の「アイスマン」復元模型展示。旧石器時代の洞窟壁画文化、石器の展示、古代文明の展示も充実。

- ・地中海古代文明のコーナーを紹介。エーゲ海の初期文明、古代ギリシアの絵画土器、大理石の彫刻。古代文明の文物と建築を、石材や材料の視点で展示するなど、自然史博物館の本質でもある「学際的な原則」が、分かる。このコーナーで、博物館の仕組みとして「学芸解説者」**Docent** のシステムを事例紹介。**Docent** の方々が、各所に配置されていて、対話を

しながら科学の楽しみを共有する。多くはボランティア活動と聞く。それぞれに専門分野を持っていて、博物館に登録し、都合のつく日時に解説活動を行なっている。解説のためのワゴン車に、必要な資料や小道具を積んで、その都度、出場する。ワゴン車には、スミソニアン協会のロゴマーク、青い空に黄色の太陽が見える。ここでは、古代地中海文明を、地場産業とつないで現代的に説明。伝統的な食事文化と、古代文明の系統や由来を、セットにして分かりやすく理解してもらう。エジプト文明からの系統、オリーブオイル、ワイン、パン、ブドウなどのフルーツを事例に古代文明を説明。

・2008年度のバックヤード経験を紹介。東北大学文学研究科歴史科学専攻と、スミソニアン自然史博物館との教育交流に際して、同博物館教育部の知念淳子氏のお世話になり深く感謝。大学院 GP プログラムの「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」で東北大学院生を引率。教育部は学芸（研究部）とは独立した専門的な分野と位置づけられる。展示や教育は高く評価された分野であるということ。展示担当者、学芸解説者 Docent へのインタビュー、ワゴン車準備の実際などを研修。当時、新しくオープンしたホール「大海洋」The Ocean Hall でも研修。また巨大な収蔵施設の内部を見学。隣接するメリーランド州にあって、自然史博物館からシャトルバスで学芸職員が利用する。収蔵庫内部のキャビネットを親しく見学。アメリカ南西部の土器標本の優品など。

・アメリカ・インディアン博物館の外観、展示ホールの様子。19世紀半ば以来の、膨大な収蔵品から、厳選された資料を展示して、生活と世界観、各民族が持っている価値と伝統を、詳しく展示。講座ではスライド多数で展示各階から選んで紹介。ニューメキシコ州のサンタクララ・プエブロ（プエブロは、集合集落）、アラスカ州のエスキモーの生活など。

・常設の特別展示（2014年9月21日～2025年1月25日）「国家から国家へ」Nation to Nation は、2018年アメリカ考古学会開催中に見学し、講座では多くのスライドで内容を紹介。合衆国の西部への拡張と、1851年のホースクリーク条約。インディアン諸族への迫害、抵抗戦争、カスター部隊との衝突、その後の虐殺事件（サウスダコタ州のウーンデッドニー）、1960年代～80年代のレッドパワー運動（インディアン諸族の権利回復闘争）、遺骨や文物の返還問題などに関して、多くの実物資料を、象徴的に展示して、歴史観の変革を迫る衝撃的な常設展。バッファロー（野牛）に生活のすべてを依存していた平原インディアン諸族が、いかに追い詰められて迫害されていったかが、当時の資料、解説地図、古写真、残された民族資料の実物、デモ隊のサインなどを通して、モノに歴史を語らせるという博物館展示論の実例として、学ぶところが大きい。

・古今東西の歴史資料は、無限に残っている中で、その中から何を選択し、どのように組み立てて歴史叙述を構成するか、これは古くて新しい問題です。今回ご紹介した内容でも、違って見えるストーリーを組み立てることができるでしょう。本講座では、歴史博物館をグローバルに訪ねることで、人類の歴史をさまざまな視点から考え直す試みを続けます。

（本稿は、館長講座での配布要旨に補足したものです。）